



三重大学



生物資源学部・共生環境学科

2016年の国際地学オリンピック世界大会の三重県開催を期に、推薦入試で科学オリンピック枠を設けました。詳細は募集要項をご覧ください

母なる地球が育む多様な生態系から成る地球生命圏の環境を理解し、保全・修復しつつ、人間活動と生態系が調和する持続的な生物生産システム構築を目指している。このため、本学科では、陸圏・海洋圏・大気圏が複雑に連動する地球生態システムを対象に、「微生物相」から「地球そのもの」というようなミクロスケールからマクロスケールまでをカバーする気象学・環境科学・生態科学などの基礎サイエンスに根ざした教育・研究を行っている。学科は22の研究室、32名の教員を擁するが、以下に紹介する研究室を始め地学や地球環境関係の多数の研究室がある

気象・気候ダイナミクス研究室

入学後の初年度から気象、気候、地球環境を本格的に学べるカリキュラムが整い、複数の気象関係の研究室が同一の学科に擁する大学は三重大学を始め少数です。異常気象や気候変動がなぜ起こるのか？人類はその答えを得ていない。観測とシミュレーションでその謎解きに挑んでいる。(立花義裕 教授)

気象解析予測学研究室

気象に関連した様々な観測データと予測データが日々大量に生産されています。私たちの研究室では、主にこれらのデータを解析することにより、さまざまな気象現象のメカニズムの理解と、気象予測情報の社会への活用を目指しています。(西井和晃 准教授)

海洋気候学研究室

二酸化炭素などの増加で気温が上昇し、地球温暖化がいろいろな異常気象の原因ではないかと言われている。海洋でも北極海の海氷の減少や深層水温の上昇などの異常海洋現象が報告されている。大切な地球環境を守るため、気候変動の核となる海洋をいっしょに調べましょう。(関根義彦 教授, 山田二久次 助教)

未来海洋予測学研究室

地球の表面積の7割を占める海は、大気を暖めたり冷やしたり、水蒸気を大気に与えたりすることで、地球の気候に大きな影響を及ぼしています。海が寒波や猛暑、集中豪雨、台風や干ばつに果たしている役割や、海の将来の変化が気候変動にどのような影響を与えるのかを調べています。(万田敦昌 准教授)

地球システム進化学研究室

“地球とともに生きる”～地球温暖化・エネルギー等の人類的課題に対し未来展望を明らかにするためには人間を含む地球をシステムとして理解することが大切である。(1)「これまでの地球」についてと、(2)「これからの地球」の持続的な地球システムについて研究しています。(坂本竜彦 教授)

土壌圏システム学研究室

生態系や気候形成、植生の状態を支える土壌-植物-大気間の水・エネルギー・物質循環システムの解明を、実験・観測と数値解析に基づき行っています。特に凍土地帯の物質循環や凍土の利活用についても考究できます。(渡邊晋生 教授)

水環境・自然災害科学研究室

水を「自然の恵み」ととらえるか、「災害を起こす脅威」ととらえるか？当分野では両方の観点から「水」を考え、良好な水環境を守るとともに災害から人を守るための教育・研究を行っている。降水や洪水、豪雨災害、洪水災害、地震(特に南海トラフ地震)に重点を置いている。(葛葉泰久 教授)

緑環境計画学研究室

生態系機能や生物多様性に配慮した森林の持続的利用・保全方法を構築するため、日本の温帯林やアジアの熱帯林、半乾燥地林などで樹木の生理生態から林分の成長予測、森林の資源管理まで様々なスケールの調査を行っている。(松村直人 教授, 松尾奈緒子 講師)

応用地形学研究室

河川管理計画、地域計画の策定に当たって、長期的な安定性や持続性を考えるために重要であり、かつ基礎的な要件である地形学について理解を深め、完新世における自然環境の長期基層変動を考えて地形形成プロセスの解釈を目標とした教育研究を行う。(春山成子 教授)

フューチャー・アース学研究室

気候変動による環境変化が人間社会に与える影響を、現地調査を基本に、衛星データ解析、地理情報などの技術をと重ね合わせて、近将来の時間スケール(30年)を念頭に、地球生命圏で起こりえる変化やその脆弱性・可塑性への分野横断的理解を進める教育研究を行います。(飯島慈裕 准教授)